

株式会社アドバンテスト

2019年3月期(2018年度)第3四半期決算説明会 質疑応答要旨

2019年1月30日(水)

Q : 今回出した2019年のテスト市場予想の前提条件として、今年好調だったSoCテスト需要へ米中貿易摩擦が与える影響度や、メモリ・テスト市場の回復時期などについて確認したい。

A : SoCテスト需要に米中貿易摩擦がどの程度影響を与えるか、当社では見通せていない。ただ7nmノードを採用したAP(アプリケーション・プロセッサ)を搭載した高性能なスマホの需要拡大は今後も期待できる。ミドルレンジのスマホの高性能化も続いており、APのテスト時間は長くなる方向。18年並みとは言えないが、スマホ新製品に関連したテスト需要は続くだろう。メモリ在庫調整は今年の6月までに終わるのではないかと考えている。6月から9月までの間には、設備投資も再開されると想定している。

なお今回、米中貿易摩擦が今後さらに激しくなるという前提には立っていない。仮にそうになって、その結果マクロ経済が悪化するようなことがあれば、今回出した予測よりも市場が落ち込む可能性もあるだろう。

Q : マイクロLEDの将来性に対する見方は。

A : ドライバ回路自体は従来とそう変わらないと思われるが、LEDディスプレイの色をどうチェックするかがまだ技術開発途上で、お客様も悩んでいるところです。当社もテスト上でどのように色のチェックのアルゴリズムを組むべきか考えているところで、今後力を入れようと思っている。

Q : SoCテストで18年にシェアが上昇した理由を確認したい。御社が得意な市場が伸びたのか、競合からシェアを奪ったのか。併せて19年のシェア見通しも教えてほしい。

A : 18年は急激なシェア変化があった。中期経営計画上は、もっと着実にシェアを上げていく戦略だった。シェア上昇の最大の要因は、競合企業の主要顧客のテスト投資が減ったことだと考えている。ただそれだけではなく、SoCテスト需要が前年から伸びた分をすべて当社が獲得したという要素もある。競合企業は、ある半導体企業のサプライチェーン変更に伴った特需が我々にあった、とコメントしたようだが、そういった事実はなく、我々の幅広い製品ポートフォリオが、拡大するテスト需要を幅広く掴んだ結果のシェア上昇と考えている。ただ、大手顧客の投資動向が市場シェアに与える影響度は大きく、シェアの変動は起こりうるので、市場シェアを維持できるよう、幅広い顧客ベースという当社の強みを活かしていきたい。

Q : 19年の市場シェアの見通しを教えてください。

A : SoC テスタのシェアは、今年並みを維持したい。メモリ・テスタについては、既に 60%以上のシェアを有しているが、より高いシェアを見込める。今後メモリ半導体がハイエンドになればなるほど、当社がもっとシェアを伸ばせるチャンスが出てくる。市場は縮小すると予想しているが、当社の売上の縮小幅は市場変化よりも小さくなることを期待している。

Q : 御社は限界利益率が高く、減収が大きな営業減益につながってしまう。来期費用削減を実施することは想定しているか。

A : 当社は、売上が減少すると連動して人件費が下がる制度を導入している。ただ大きな経費抑制をして利益を底上げするような時期ではない、と率直に思っている。19 年は売上が落ちるかもしれないが、投資をするフェーズであると考えている。もちろん、ムダな経費を使うということではない。売上看合った経費削減はできると思っており、その上で M&A も含め、色々な方策による売上拡大努力を続けていきたい。

Q : 御社の説明会資料のとおり 2019 年がシクリカルグロースの通過点であるとする、2020 年のテスタ市場はどうイメージすべきか。メモリは在庫調整の先に 5G 関連需要の立ち上がりがあると思うが、SoC はどうか。AI 機能が付いた AP や TDDI (Touch and Display Driver Integration) のテスト需要はそのタイミングでは一巡してしまっていないか。それとも新たな需要源が期待できるのか。

A : 20 年から本格化する 5G が、SoC テスタ市場も牽引することになると考える。メモリも大容量化するし、SoC テスタ市場も成長フェーズに入るだろう。特に 5G 基地局関連ビジネスはかなり大きなものが見込まれる。基地局投資が本格化したら、テスタ需要も拡大していくだろう。

Q : 4Q は例年季節的に強い受注・売上があるが、今年は期待していないのか。

A : 今年はメモリ市場で設備投資が抑制されている中、4Q に大きな受注は見込めない。また 1 年前と状況が全く違って、昨年は当社の製造リードタイムが長期化したことで、テスタ確保に向け早めにテスタ発注が行われ、結果受注高が膨らんだ。今は、世界経済の不確実性が高まる中、早期にテスタをどんどん確保しようという動きは抑えられていると思う。これらを総合して 4Q の受注予想を立てた。

Q : 5G 端末向け需要、5G 基地局向け需要の本格貢献時期を確認したい。また 4G 基地局需要が過去どれほどあったかも確認したい。

A : 4G 向けは 2015 年から 16 年に需要が伸びたが、5G は今ちょうど立ち上がろうとしているところ。まだ初歩的な段階とも言え、ビジネスとしては 20 年から本格化するだろう。そしてピークを迎えるのは 20 年後半になるだろう。

Q：19年の市場見通しに沿うと、来期の売上総利益率はどのくらいの水準となるか。現状維持か、あるいは一定程度下がるとみるべきか。

A：どちらかというと、メモリよりも SoC テスタの方が売上総利益率は高い。今回、市場減速をメモリの方でより強く見込んでいるため、売上総利益率としては今年と同程度、ないし少し上がるレベルを目指すことになると思う。

Q：19年の SoC テスタ市場は YoY-15%という予測だが、これの上期・下期のイメージはあるか。下期にどのくらいのペースで回復するのか、またその回復を牽引する半導体品種は何か。

A：スマホ新製品の市場投入時期と先端ノードの歩留まりがポイントとなる。19年上期対下期ではおよそ4対6の比率となるだろうか。

Q：APへのAI機能搭載がテストの長時間化をもたらしているが、今後テストタイムを長くしていく要素としてはどのようなものがあるか。

A：製造プロセスの変化がテストタイムに最も影響するが、顧客のテストコスト削減への取り組みや製造プロセスの歩留まりも影響している。19年はEUVの採用が本格化するがこれがテスタ需要にも影響すると考えている。またDDI (Display Driver IC)については、CoF (Chip on Film)化が2倍・3倍にテストタイムを伸ばす一方で、技術的な要因で同時測定数の上限は4個となってしまう。CoF化が進むことが、テスト需要を伸ばしていく。

Q：DDR5 DRAMは御社のメモリ・テスタのビジネス上どのような機会があるか。また御社の競合が高速DRAMテスト市場に参入したいとコメントしていたが、どう考えるか。

A：DDR5の立ち上がり時期は19年末になると考えている。DDR5やLPDDR5が使われるアプリケーションはサーバーやスマホとなる。スマホ大手2-3社が、20年に発売されるスマホ新製品にDDR5を採用する見通しで、19年6月からメモリメーカー各社のサンプル出荷が始まっていくだろう。この新メモリに対しては、当社は既にソリューションを提供済み。高速なDRAMのためテスタ側のスペックとして8Gbps対応が必要だが、当社に技術リードがあると考えており、シェアを獲れるだろうと考えています。

以上

※本資料に記載されている内容は、決算説明会の質疑をもとに当社の判断で要約したものです。また本資料には、将来の事象についての、当社の現時点における期待、見積りおよび予測に基づく記述が含まれております。これらの将来の事象に係る記述は、当社における実際の財務活動や活動状況が、当該将来の事象に係る記述によって、明示されているものまたは暗示されているものと重要な差異を生じるかもしれないという既知および未知のリスク、不確実性その他の要因が内包されており、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。